

親鸞聖人と「南无」阿弥陀仏

【発端】

私たちは日常、お仏壇の本尊に手を合わせ合掌し「南無阿弥陀仏」と唱え、また「なまんだー」「ナンダブ」「ナム」とお勤めなどを行っています。そこには特別の思いを込めていなく、「阿弥陀様に感謝」の気持ちで口をついて出ているのでしょう。

岩波『仏教辞典』によれば、「南無とは、サンスクリット語 *namas, namo, namah* の音写で、〈なも〉とも読み、敬意を表すために体を折り曲げること、“帰依”、“帰命頂礼”を意味します。佛法僧の三宝に対して〈ナムサン・南無三宝〉、略して南無三、危機に際して佛菩薩に救護を祈念する場合に用いられることが多く、危険や失敗に驚く時に発する感動詞的表現ともなった」とあります。

当寺の本尊は像ですが、ご家庭の仏壇の中のご本尊には、阿弥陀仏の絵像か南無阿弥陀仏の掛軸が拝む対象として祀ってあります。漢字で書かれたその掛軸については、いつものことですが、深い意味を考えたことはほとんどありませんでした。しかし仏具通販冊子の本尊掛軸の写真を見て、不思議な感覚を覚えました。いつもは何となくページをめくるのですが、その通販の印刷掛軸には、親鸞書と思われる「南无阿弥陀仏」と蓮如上人の書と思われる掛け軸「南無阿弥陀仏」の 2 点があり、思わず目が止まりました。

親鸞聖人書の方は、「南无」の「无」は「無」の旧字ですが、掛軸全体のバランスから見て「南无」が非常に大きく強く、「无」が右に跳ねるように書かれており、下の「阿弥陀仏」がごちんまりと普通に書かれていて、阿弥陀に南无と、何かに訴えるというか、筆者の何か気持ちが表れている、強い信念が強く「阿弥陀佛」に懸かっているのではないか、と感じられたのでした。

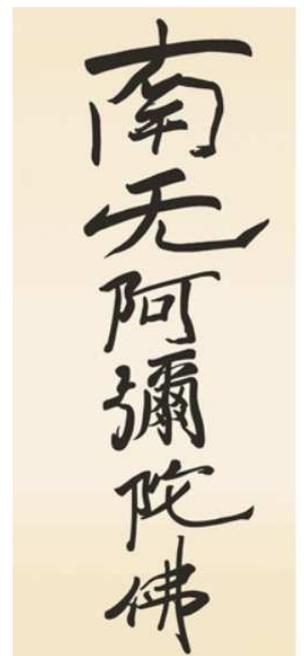
「南无」と大きく書いたためその下のスペースが無くなったので、残されたスペースに合わせて「阿弥陀仏」を小さく書かれたとは思われません。

【南无】

道場に安置するべき本尊は、仏像ではなく名号がふさわしいと考えられ、当時は名号以外に、いろいろな物が信仰の対象として用いられていました。親鸞聖人は在家仏教の考えから名号本尊を、煩惱を備えた心のままで佛を念ずる道ととられました。『教行信証』行巻に、「心を阿弥陀如来一つに向けて、お姿を眺めないで、もっぱら南無阿弥陀仏と名前を称えれば、直ちにその念仏の中で彼の阿弥陀仏及び一切の佛を見ることができる」=藤井哲雄東本願寺学院教授訳=と述べておられます。阿弥陀仏を直接見ることは不可能であり、ただ南無阿弥陀仏と名を呼ぶ念仏が凡夫の心の中に入り込んで、その煩惱の迷いを溶かして仏の心に転じてくれるという、救いの働きを呼ぶことができるとされました。名号には「南无阿弥陀仏」の六字名号から、「南无不可思議光如来」の九字名号、「帰命尽十方无碍光如来」の十字名号などあり、親鸞聖人が用いられたのは、十字名号でありました。

親鸞聖人直筆の名号で現在まで残っているのは七幅しかなく、その中で四幅が十字名号で、六字名号の「南无阿弥陀仏」は非常に少ないのです。通販で販売されている六字名号は珍しいものです。(写真参照)

この写真は京都の西本願寺の掛け軸の字に非常によく似ていますが、細かい部分で



違うところがあるようにも見えます。あるいは、これを模写した物と言えるのではないかと思います。しかし「南无」の字の大部分は、よく似ているといえましょう。

【筆法】

問題はその筆法です。の部分は 親鸞聖人の筆癖というか、細い筆の根元まで使って少し右上に大きく引きあげ、終りの部分はそのまやや真横に引いて終わります。筆の穂先がやや曲がったまま、南の字の真ん中を下に引き最初の横棒と交差するところで左に「ノ」の字を書き、大きく「羊」の字を囲むように線をやや内側に引き、最後は軽く左下に跳ねています。「无」の字は、現代では「無」が使用されていますが、直筆では「无」のように書かれ、特に、二本目の横にひっかけて引く線は、やや軽く上に反って大きく引き、筆の最後はやや勢

いそのまま止め、「ノ」の字は普通に左に引き、最後の点を除いたの部分をおおしく跳ねるのは、筆先を整えやや下に引き、次に大きく右に引いて最後は右斜め 45 度上に大きくは跳ねあげています。この結果、「南无」の字がとても大きく、用紙天地の 45% 位が「南无」で占められています。ほかに「南无不可思議光佛（または如来）」でも、同じことが言えます。



【意味するもの】

この字の異様な姿は、従来ほとんど問題にされていません。晩年に起きたいろいろな事柄が親鸞聖人の心の中に渦巻き、蓄積し、反発し、残念に思い、その結果、全てを阿弥陀様に「南无」する、一切お任せするという、心の表れが字となって表れたからではないかと思えます。

親鸞聖人の晩年に起きた、心をえぐるような事柄には次のようなものがあります。

- 1、この一幅が書かれた時代は、親鸞聖人 83～84 歳ころです。建長 7 年(1255)12 月 10 日、親鸞聖人 82 歳の時、京都五条・西の洞院にあった聖人の住居が大きな火災に遭い、聖人は焼け出され、以後、弟尋有の宿坊であった三条富小路の善法坊に移られた事。その際、娘の覚信尼が越後の母、恵信尼から送られていた“下人譲り状”を、この時焼いてしまい、大きな悔悟の念を抱いたと思えます。
- 2、62 歳ごろ関東から京都に帰国以後、関東にいる聖人門弟達の「放逸無衡」や「諸神諸佛軽蔑」の動きの知らせが届き、やむなく息子の善鸞を関東に派遣しました。その結果、善鸞義絶という大きな事件にまでに発展して、関東の門弟や信者達との確執に心を悩ませ、阿弥陀様にすがる気持ちがあったと思われています。
- 3、建長 6～8 年頃、聖人は執筆にも力を注ぎ、多くの著作を残しました。『唯心鈔』『二河白道の比喻』『愚禿鈔』『西方指南鈔』『皇太子聖徳奉賛』『入出二門偈』『往相回向還相回向文類』『一念多年文意』などおおく著し、多くの先人の書写や手紙を書かれました。この頃鎌倉幕府による「念仏弾圧」と善鸞による裁判が親鸞聖人の心を悩ませました。
- 4、親鸞聖人の一番大きな著書は、『教行信証』6 巻です。大筋は関東時代に出来ていて、親鸞聖人が京都に帰る時、箱根で性信房に渡されたものです。『教行信証』が書かれた理由にはいろいろな説がありますが、その中の一つに、師の法然上人が書かれた『選択本願念仏集』の教義を内外から脅かす一連の動きに対し、親鸞聖人は本願念仏の教えをより純粹なものにしようとしたという説があります。海外の經典や文書から体系的に多くの例文を引き、また自らの意見も入れた「文類」という形式で論破しようとしたものです。その一例の一人に、鎌倉時代の華嚴宗の僧、明恵聖人がいました。彼は法然上人の『選択本願念仏集』に対し、『摧邪輪』を著して易行論や念仏を痛烈に批判しました。親鸞聖人は、師匠の法然上人の教えを擁護する

目的で詳しく反論し、何度も『教行信証』を部分的に加筆添削され続けました。法然上人の考え方を堅持したいという強い思いがあったと思われま

- 5、善法坊には常に人々が訪れ、親鸞聖人の身の回りの世話をする人々の中に、後の高田派専修寺の人々がおられ、親鸞聖人が 83 歳と高齢のため絵像を残したいと希望される方もいて、現在国宝となっている「熊皮の御影」などが絵師に依頼して描かれています。絵像を描く間の緊張と完成した時の感謝の気持ちがあったと思われま
- 6、27 年ぶりに関東から京都に帰られてからの親鸞聖人の御生活は、かなりご不自由ではなかったかと推察されます。絵伝に「年々歳々夢の如し、幻のごとし」とあります。晩年の手紙によると、専ら関東の門弟達からの仕送りで賄われておられたことがうかがわれます。門弟から送られてきた金子に対して手紙でお礼を述べられたものが、残っているものだけで 7 通あり、「御ころざしのぜに 3 百文、たしかに、たしかに、かしこまりてたまわり候」「～何とももったいないことです」などと礼状でお礼を述べておられます。その報恩感謝の気持ちを阿弥陀様のお力と思ったのではないのでしょうか。
- 7、『教行信証』文類Ⅱ(2)に『「南無」と言うは、即ち是れ帰命なり。亦是発願回向の義なり。「阿弥陀仏」と言うは即ち是れ其の行なり。また「帰命」は本願招喚なり。同(8)十方群生海、この行信に帰命するものは、攝取して捨てたまわず、故に「阿弥陀仏」と名づけたてまつる。是を「他力」という』と書かれました。また、『真宗聖典』尊号眞像文末 8・善導・玄義の「南無」は即ち帰命と申すことなり、「帰命」は即ち釈迦・弥陀の二尊の勅命に順ひ召しにかなふと申す語なり、この故に「即是帰命」とのたまえりと書かれています。このように「南无」と言う言葉に強い思いがあると思われま

す。この信念に基づき、親鸞聖人は『正信偈』という 120 行の偈文の最初に「帰命無量壽如来 南無不可思議光」という、全てのエッセンスともいべき阿弥陀様への帰依を大らかに宣言しました。

【まとめ】

親鸞聖人は、傍に仕えていた眞佛や、その子の顕智や専空など、後の高田派の人々などに所望され、丈幅の用紙に「南无阿弥陀仏」や「帰命尽十方無碍光如来」の字を書いて与られました。親鸞聖人を看取った後、あとに残された多くの著作や文書などは、親鸞聖人が開祖の高田派専修寺に引き継がれ現在に至っています。これには直筆の名号も含まれ、その中に問題の、「南无」が大きな字で書かれた掛け軸がありました。これは間違いなく、親鸞聖人が 83～84 歳ころ、困難なご事情の中でお書きになったもので、力強い大きな字で、信仰心のこもった、阿弥陀様に状況の解決をお任せし、委ねる「南无」をお書きになり、その下に、通常の子で阿弥陀仏と続けてお書きになったものではないかと思われ、ありがたく受け取らせていただきました。

以 上

- 参考文献 『真宗聖典』法蔵館 昭和 47 年 10 月 20 日 18 刷
『親鸞聖人の生涯』上中下 藤井哲雄著 中山書房仏書林 平成 17 年 3 月 26 日発行
『福生』カワガ 掲載 表装掛軸 平成 27 年 5 月発行
『真宗重宝聚英』第 1 巻 昭和 63 年同朋会出版発行 より
『法然と親鸞ゆかりの名宝』特別展 図録 より